

木材価格と林業支援

スギの価格下落がひどい。2000年住宅品確法以降はもう一段下がり、昨今では径級の小さい丸太は立米1万円を切るところも出ている。スギ50年生の立木ベースで計算すると、皆伐の場合1haあたり材積670立米として売却代金は295万円、新植保育間伐等の育林経費270万円を差し引くと手元に25万円しか残らない。丸太ベースで考えても同様で、伐出集材コストが立米当たり7～20千円ぐらいかかるので場所によっては持ち出しになる。まして間伐材となれば単価はもっと低い。投資した資金の利子費用さえ賄えない。つまり木材生産業としての林業は成立しておらず、我が国ではこの状況になって久しい。しかし森林は単に木材を産出するのみならず社会的公共財としての多面的機能を持っており、我々人間社会にとっては不可欠な存在である。

これまでは厳しい環境下においても森林

< 木材価格の推移（単位：円／立米） >

	1975年	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2004年
スギ立木	19,726	22,707	15,156	14,595	11,730	7,794	4,407
スギ丸太	31,000	38,700	24,900	26,000	21,700	17,200	13,500

（平成16年度版）森林・林業白書より

所有者や森林組合等の山元が、自己収入を度外視したり、労賃・労働条件を削って半ば社会奉仕的に森林整備を担ってきたがもう限界である。日本の森林と林業には持続可能な水準の補助金や人的サポート等を含む国民的な支援が不可欠になっている。厳しい財政事情下、人工林1千万haすべてにこうした支援は事実上困難であるため、経済林として支援を得ながら今後も経営する森林を絞り込み、できないものは再線引の上で自然力を生かした施業を確立することで混交林化・自然林化をはからなければならないだろう。経済林施業も従来の皆伐一斉造林から育林コストの低い複層林・長伐期・択伐施業へと変えていくべきだろう。

また、森林・林業危機に対処するには山元でも従来の林業のあり方を考え直すことも必要だ。世代交代により森林の経営に関心や意欲の低下した零細森林所有者をとりまとめて効率的な施業やそのための路網整備を行って、森林の場所や機能によっては保安林指定等も行い、コスト削減と放棄林回避へ向けた取組を強めるとともに、多様な森林の恵みを活かすビジネスへと林業を変えていかねばならない。これまで以上に森林組合本来の機能強化が求められているといえる。

（田中一郎）